

【中央大学】

実地応用の素を養うビジコン

清水 大輔 ● 中央大学学事部学事課

本学主催のビジネスコンテスト（以下、ビジコン）である「中央大学野島記念 Business Award」が、10回の節目を迎えた。

ビジコンとは、出場者が事業計画書を作成し、それに基づくプレゼンによってビジネスモデルの完成度を競うコンテストである。ビジコン自体は官民を問わず多数実施されているが、本学の場合は学生に対する奨学事業の一環であり、かつ学生主導の運営である点に特徴がある。

1 出場者も学生、運営も学生

このビジコンは、本学の卒業生で株式会社ノジマの社長・野島廣司氏の奨学寄付を基に運営されている。野島氏の願いは、法曹や会計士の世界だけでなく、ビジネス界で活躍する後輩を増やすことであった。この奨学生の

選抜方法に、奨学委員会ではなく、在学生を対象としたビジコンが選択されたのである。

現在の運営は、全学部からの希望者による実行委員会が行っており、1、2年生を中心に個性あふれるメンバーが集っている。学事課の業務は、学内部署との調整など、委員会に対する側面からの支援が中心である。

この企画に限らず、学生による運営は知識不足に起因する困難が多い。しかし、学生はビジコンの実施を通じて企画や組織の運営方法を学んでいく。さらに、ビジコン特有の体験——収支計画、競合分析といったビジネス知識の修得、提出された事業計画の類似性チェックなど——が学生を大きく成長させる。就職活動で先輩を訪問する学生は多いが、卒業生でもないベンチャー企業の社長を訪問し、協力交渉まで行っている学生は珍しいであろう。そうそうたる審査員・講師の顔ぶれは、大学のツテではなく、歴代の委員が直接交渉し、またこれを意気に感じた審査員たちの紹介で開拓した結果である。

2 面倒見のよいビジコン

さて、出場者に与えられる課題は、創設時から一貫し

て「新規事業」である。挑戦の過程は起業の作業と重なるため、ビジネスを意識したことがない大多数の学生にとって高いハードルである。しかし、安易にハードルを下げてしまうと、コンテストはビジネスごっこの域を出ず、篤志家の思いは果たせない。

出場者数の確保か、品質の保証か。大学経営にも似たこの問題に対し、実行委員会が試行錯誤の末に作り上げた形は「面倒見のよいビジコン」である。初めてビジネスに挑戦する学生に対して、事業計画書の書き方やアイデアデザインの支援講座を準備し、本選出場者には、本学ビジネススクールの学生によるメンタリング（対話による気付きと助言の機会）を与えることにより、思い切つて飛び込んだ「出る杭」を伸ばすスタイルである。

無論、他人の力に頼ったプランでは、本学教員による書類審査、ベンチャー企業社長や投資家の目が光る予選審査を突破することはできない。決勝に進めるのは、世の中を良くしたいという「志」を持ち、現場に足を運び、検討と試行を繰り返した結果、完成した骨太のビジネスプランである。まさに本学の建学の精神「實地應用ノ素ヲ養フ」を実現する場である。

3 志はつながる

その成果は、今年を受賞プランでご覧いただきたい。「獣害で駆除される鹿を、高品質の食肉として流通させる販売網の構築」「LGBTとALLY対象のサービス付き高齢者向け住宅の展開」「補聴器の問題を解決する『耳』になるメガネの提供」など、いずれも実社会の問題を鋭く捉え、昇華させた事業である。

また、大会にはかつての優勝者が応援に駆け付けた。株式会社Robot社長の高橋勇貴氏は、記念講演で「たくさん失敗してよかった。たくさん挑戦してたくさん失敗してください」と学生に呼びかけた。ビジコンは、毎年本学に、たくましい若者をもたらしてくれるのである。

4 今後の展望

一方、本学の学生数と出場によって得られるメリットを比較すれば、現在の出場者数は、まだまだ「もったいない」としか表現できない。ビジコン活性化のために、優勝後の起業サポートを充実させたり、学内でビジネスプランのテストを推進するなど、教職員による「新規事業」の創設が急務である。

【恵泉女学園大学】

大学の良さ・魅力とは？

——恵泉女学園大学フォトコンテストを
通して

篠田 真理子 ● 恵泉女学園大学人間社会学部准教授

1 フォトコンテスト実施まで

「恵泉の良さをもっと多くの人に知ってもらいたい！それにはフォトコンテストがいいと思うんです。ツイッターなら学外の人も見るし、伝わるんじゃないかと」。現代社会学科2年生の鈴木さんがそう言ったのは、2016年4月下旬。それなら協力するよ、と一緒に頭を絞ることにした。彼女がコンテスト用のツイッターアカウントを取得したのは5月末。鈴木さんが作ったポストでも学内に掲示し、公募を始めた。

当初は、ツイッターの「いいね」の数でも投票を募るという構想だった。諸般の事情でツイッター投票は実施できなかったが、11月の恵泉祭にポスターを掲示して投

票を募るという方式に切り替え、無事、コンテストを行うことができた（上位作のみツイッターで報告）。

鈴木さんから学生と筆者で、実施方法を話し合っ、応募条件は「キャンパス内で撮影した写真」。ここまではすんなり決まったが、検討すべき事項がいくつもあった。

① ツイッター上でも応募できるようにするか、メールだけか？（アカウントを取得し、メール応募に限定した）

② 写真の画質は？（高画質であれば印刷や拡大した時に見映えがする。しかし、学生に気軽に応募してもらいたいという意見が出て、スマートフォンで撮った写真も可とした）

③ ツイッターで公開するからには、被写体になった人のプライバシー配慮が必要だ（顔がはっきり写った写真はNG。後姿や顔が分からない程度の引き、ボカシであるなどであれば可」とした）

④ 応募作品に、公開に適さない作品があったらどう対処するか？（ケース・バイ・ケースで考える）

学生や教員から応募があり、応募総数は10点。広報が行き届かず、点数は少なかったものの、運営上の議論を

重ねたことは、今後もコンテストを続けていくために役立つだろう。

2 コンテスト入選作品

黒雲を背景とした校舎とチャペルが異国の風景のように見える、タイトル「ホグワーツ魔法魔術学校?!」が2位、オレンジ色の花卉の上で静止した子カマキリを接写した作品（タイトルは「礼拝ちう」）が3位に選ばれ、聖



1位になった「さんぽ日和」

書・国際・園芸をモットーとする恵泉女学園大学の特色を連想させる写真が上位に揃った。1位は、人間環境学科4年生の布施木展子さんが撮影した写真である。タイトルは「さんぽ日和」。教育農場で撮影された、「雪が降ったあとに、雪が降るまの畑で、雪だるまの

親子に出会いました。」とのひとことが添えられていた。

東京には珍しい積雪があった翌日。里山の黒々とした雑木林を背景に、誰かが作った雪だるまの親子が浮かび上がる。手前には丸々と結実した白菜が雪を被り（甘味が増すそうだ）、茶色く枯れた白菜は、店頭に並ぶような傷一つないきれいな野菜ではない。しかし、これが恵泉生がなじんだ農場の風景だ。

恵泉女学園大学には、「生活園芸」という特色ある科目がある。「生活園芸Ⅰ」は全学部共通の初年次必修科目だ。有機栽培の教育農場で、野菜などを育てる。栽培に興味を持って恵泉に入学した学生も多いが、土いじりに全く興味がない学生や虫を嫌がる学生もいる。それでも、卒業時に、最も記憶に残っている授業はと聞くと「生活園芸」が挙がる。布施木さんは、「恵泉生なら誰が見ても撮影場所が分かる写真で応募した」と語る。

大学の魅力を発見し、伝えたいという思いから始まったフォトコンテスト。1位作品には、人の手で育ててしっかり実った野菜のもつ生命力あふれる美しさや、雪だるまの親子から感じられる温かさが表現されている。投票によって選ばれた作品には、恵泉女学園大学の良さと魅力が集約されている。

【芝浦工業大学】

ロボットセミナーの全国展開 と全国大会の実施

荻田 忠伸

●芝浦工業大学地域連携・生涯学習企画推進課長

芝浦工業大学では、教員が講師、職員が進行、学生が指導員を担当して、全国大会まで実施するロボットセミナーを、日本各地で15年以上にわたって行っている。

1 大学独自のロボットセミナー

1984年に東京都港区と協力し、ものづくり教室でロボット作りを開始。その後、2000年に現在の形式に整備し、公開講座の一環としてスタートした。教職員に加え、学生や留学生も運営に携わっている。

ロボットセミナーは小・中学生から大人までを対象に、ロボットの製作からプログラミングまで、受講生のレベルに応じてさまざまな講座を開設している。現在は日本各地で年間48講座を開催し、約2500人の受講者を集め、2000年からの累計受講者数は約2万5000人

に上る。

特にロボット製作の講座では、ただ単にロボットを作るだけではなく、競技会とデザインコンテストを実施する。ロボット製作による科学・工学への興味喚起に加え、標準ロボットに装飾をしてオリジナルロボットの製作までさせることにより、創造性の発揮を促す内容にもなっている。また、大学の教員からロボットや最新の研究内容に関する話を聞く機会を必ず設けていることも、子どもたちの興味喚起に効果を発揮している。これらロボットセミナーのプログラムは各所で高い評価を受けており、2013年には日本工学教育協会から工学教育賞を受賞した。

2 ロボットセミナー全国大会

現在8種類ある教材のうち、小・中学生を対象とする3機種（4足歩行「ビートル」、6足歩行「ボクサー」、8足歩行「スパイダー」）のセミナー競技会上位入賞者を大学に招待し、全国大会を実施している。参加者も年々増え、年に一度の祭りのような盛り上がりとなる。

2016年度は、昨年11月20日に東京都港区の本学芝

浦キャンパスで第16回全国大会を実施。札幌や福岡など12の地方会場を含む32講座が全国大会の対象講座となっており、対象者1680名中、上位入賞者134名が参加した。運営には、現役学生や留学生に加えて、卒業生や附属中・高校生、社会人ボランティアなど約60名が携わった。

各競技は、「ビートル」が小学校低学年による障害物競走、「ボクサー」は小学校高学年と中学生のグループに分けてロボット相撲、「スパイダー」も小学校高学年と中学生にグループを分けてピンポン球運搬競技を実施。いずれも各セミナーを勝ち抜いてきた猛者の集まりのため、かなりハイレベルな競技が行われる。当然、盛り上がりかたも各地のセミナーとは大違いである。「はじめ！」のアナウンスでいっせいに競技が開始されると、選手たちは一気に戦闘モードに突入する。予選が終わり、決勝トーナメントに入っても盛り上がりは衰えず、予選敗退者も応援に回って、さらに応援に熱が入っていく。優勝決定戦は2勝先取制。最後の試合となった「ボクサー」小学生の部では、1勝1敗の後、3試合目に大接戦の末に勝者が決まるという、最後まで盛り上がった大会



競技会の様子
(ボクサーロボット)

となった。

表彰式では、競技会に先立って実施されたデザインコンテストの結果も発表された。各選手や引率の保護者が、各ロボットにつき3票を投票する。強さだけを競い合うのではなく、デザイン性、創造性を評価されるデザインコンテストは、最後まで誰が表彰されるか分からない。ゼッケン番号、参加者名、ロボット名、得票数を読み上げられ、スクリーンに大写しになるロボット、どよめきに似た「おーっ」という歓声とともに、ステージに向かう参加者。競技会とは違う盛り上がりであった。

閉会のあいさつが終わり、参加者が帰途につく。三連覇を果たした者、来年の雪辱を期す者などいろいろであるが、一様に満足げな表情が印象的だった。

3 今後について

ロボットセミナーの開催件数、および受講者数の増加とともに、ロボットセミナー全国大会の参加者数も増加の一途をたどってきた。それに伴って、会場や進行などさまざまな面で問題が発生するようになってきたが、より一層多くの子どもたちに挑戦してもらえる大会となるよう、改善していきたい。